

静岡県日中友好協議会

NEWS LETTER

No.127
2022.7



花暦 蓮の花 真夏の西湖を彩る

杭州の風物詩、西湖の湖面に蓮の花が咲き誇ると、夏本番を迎えます。静かな湖面に、紅蓮、蓮白蓮、重台蓮、洒金蓮、錦蓮辺、並蒂蓮など100種類以上ともいわれる蓮の花が開花し、多くの市民や観光客が訪れます。

古くから、中国では、蓮の花は女性の象徴であり、詩歌などにも美しい女性の暗喩として、しばしば歌われ、美しい西湖は更に映えます。また、「俗人に染まらぬ、君子の花」とされ、俗人に染まらぬ清らかさの意味があると言われています。

【特集 静岡県・浙江省友好提携40周年記念事業】

書道交流展、東京と静岡で開催

本年は、静岡県と浙江省は、1982年4月に県省友好提携を締結し40周年、また日本与中国は、1972年9月に国交が正常化し、50周年という記念すべき年であります。

本協議会では、(一社)日本浙江総商会との共催、日本華人文聯、静岡県書道連盟の協力により、東京と静岡の2か所で、両国が有する文化的に、歴史的に悠久の交流がある「書」を通じて、浙江省の書道家、浙江省出身の在日書道家と本県書道家・愛好家、80幅の作品を展示して書道交流展を開催し、両県省間の友好交流を促進する一助になりました。



〈東京会場〉中国文化センター 4月18日(月)～22日(金)



開幕式では、中国大使館文化部の石永菁公使参事官がビデオメッセージで出席し、「中日国交正常化50周年の年、浙江省と静岡県がこうした交流活動を行うことは大変重要である。静岡県を含む日本の地方自治体との間で、文化・スポーツ交流活動が更に強化されることを願っている」と述べました。コロナ禍にあって、両国が共有する「書」の絆を認識し、文化の力で、積極的に向き合い、日本の中国との文化交流の大切さを発信しました。

〈静岡会場〉静岡市民文化会館 6月29日(水)～7月3日(日)

開幕式で、本協議会の栗原績理事長は、「書道家同士の交流を深める展示会にしてほしい」と、また(一社)日本浙江総商会の林立会長は「書道は漢字文化を継承するツール。展示会が両国の文化交流促進に積極的な役割を果たすことを願っている」と、双方の主催者は本展示会に対する期待を述べました。



2022年度定期総会を開催 40周年記念事業実施に協力



5月13日(金)、ホテルグランヒルズ静岡で本協議会の2022年度定期総会を開催しました。本年は、静岡県と浙江省との友好提携締結40周年にあたるため、県が行う記念事業の実施に協力すると共に、経済・文化交流などを推進していく事業計画など、上程された議案は全て承認され、新たなスタートを切りました。

【川勝会長 挨拶】

～友好提携締結40周年 友情を確認する年に～

今年は、本県と浙江省との友好提携40周年、また日中国交正常化50周年という節目の年にあたります。この間に、日本と中国との関係が指導者のレベルや様々なレベルで軌轍が生じたこともあります。しかしながら、例えば尖閣諸島問題で揺れたときも友情の絆は深めるべきだということで、相互に訪問ができるようになり、そうした一貫した姿勢により、本県は中国側から「対中友好都市交流提携賞」を受賞し、地域間交流のモデルであるとまで評価され、今日に至っています。

今年は、杭州アジア競技大会が開かれる予定であり、昨年、私共がオリンピック・パラリンピック自転車競技を開催した際には、杭州アジア大会の組織委員会の皆様方がこちらにお越しになりました。残念ながら、このアジア競技大会は延期という報道をされていますが、そうした形で厳しい中でもご訪問があったりしています。

今、世界情勢は、ウクライナへのロシアの侵略や、中国ではゼロコロナ政策で大変厳しい状況です。また、指導者同士であるとか、或いは国の政策それぞれ、お互いに理解しがたいと言われかねないようなところまで来ていても、浙江省、或いは中国の皆様方の中に、この40年以上の交流の中で友人がいますので、私たちは友のために何ができるかということを考えてきたわけです。

お互いに訪問がし難く、そしてまた国同士での緊張関係もあるといった時にこそ、我々これまでの40年あまりにわたって培ってきた人的ネットワークであるとか、友情であるとか、関係であるとか、というものが、ものをいうときであるというふうに思っています。大切なことは、決して喧嘩はしないということが、我々が富士山から教わっているるべき態度ではないかと思います。

こういう厳しい時ですので、しっかりとこの叡智をお互いに磨きあい、またお互いに共有しながら、これから新しい中国との関係をどうしていくか、なにしろ1979年というのは、中国は決して今のような先進国ではなかったわけです。知らぬ間に日本のGDPをはるかに抜いて、2倍以上になっていると、誰が予想することができたでしょうか。ですから関係も変わっていくと、相手も変わり、こちらも変わり、そして関係その変わり方が、お互いを高める方向にどうしていくか、ということでなければならぬと思います。

この40年の節目に、何か友情を確かめあえることができないかと、今、知恵を絞っているところで、ぜひ皆様方には何かございましたら、率直に言っていただき、実現できるものは一緒に実現していく、この協議会の存在感をさらに高めていきたいと思っています。





交流の歩み、35年

島田市と浙江省湖州市は、1987年5月30日に友好都市提携を結び、それ以降、経済・文化等の分野で、両市の交流・友好協力が推進されてきました。湖州市は、浙江省の北部

に位置し、人口は約341万人、面積5,818平方キロメートルの都市です。古くから養蚕業が発展していたため「絹」や毛筆の絶品と言われる「湖筆」が有名で、「絹の府、魚米の郷、

文物の宝庫」と呼ばれています。

これまで、相互に訪問を繰り返し、1989年には、島田市立第二小学校が湖州市愛山小学校と、2004年には島田市立第二中学校が湖州市第四中学校と姉妹校提携を結びました。

今年、友好都市提携35周年を迎える島田市役所庁舎に、35周年を記念した横断幕を掲げています。

現在コロナ禍の影響により往来が難しい状況にあるため、35周年記念事業は、秋頃にオンラインでの実施を予定しています。



中国料理が給食に！～中国の食文化に触れる～

島田市では、市立小中学校の給食で、さまざまな国の食文化にふれながら海外への関心を高めてもらうため、島田市と交流のある海外都市に因んだ料理を提供しています。5月2日に、今年度の第一弾として、油淋鶏（揚げた鶏肉に刻んだ長ネギと醤油ベースのタレをかけた料理）・韮菜涼拌豆芽（ニラともやしのサラダ）・鍋巴湯（おこげのスープ）など、中国に因んだ献立が提供されました。この日には、大津小学校へ島田市国際交流協会日中友好委員会の役員や中国語講座の講師が出向き、湖州市や中国に関してのお話しをして、理解を深めました。



【学校訪問の様子】



【中国料理の給食】

日本産食品を中国へ ～食品缶詰の可能性～

2022年春、上海では、新型コロナウイルス感染により、長期間にわたり、都市封鎖が行われ、多くの住民が食料不足、食料購入難の問題に直面しました。この間、市民は日常的に買いだめをするようになり、日常生活に影響をきたす中、長期保存が可能な缶詰など保存食品が注目されました。

3月11日、中国のSNSニュースサイトに「コロナ禍で、家に缶詰をストックしておいたのは間違いなかった」といった書き込みがありました。感染拡大防止のため、外出できない生活となる中、賞味期限の長い缶詰が注目されたようです。



【上海市内スーパーの缶詰コーナー】

食品である。コロナ禍で、今後も缶詰の需要が高まるだろう。」と報じていました。4月と5月に感染拡大抑止のために都市封鎖された上海市も、6月からは市民が外出できるようになりました。しかし、公共交通機関の利用時や施設に入る際には、72時間以内のPCR検査陰性証明の提示が必要で、人が密集するところを避ける呼びかけもあり、市民はリバウンドを警戒して生活しています。食糧のストックを今後も続けると思われます。また、中国では最近、キャンプの人気も高まってきています。持ち運びが便利で、手軽においしく食べられる缶詰が、キャンパーから人気を得ることも予想されます。王漸さんは、「缶詰の人気は今後高まっていくだろう」とおっしゃっていました。6月15日にはSNSサイトに「中国産の缶詰は意外と美味しい。ふるさとの味が楽しめる。」という記事も掲載されました。

中国では、缶詰の評価は高まっていると感じられます。静岡県は、魚介類、焼き鳥、フルーツなど多彩な缶詰が生産されている「缶詰王国」と知られています。静岡県産の缶詰の中国への輸出販路開拓に、静岡県上海事務所も協力していきたいと考えています。

[※ふじのくに通商エキスパートについては、こちらのサイトをご覧ください。⇒](#)



静岡県中国駐在員事務所長
浅原 敏治

ふじのくに通商エキスパート（※）の王漸さんに伺ったところ、缶詰は、作物が育たない冬の間でも食べられる食品として中国東北部で主に消費されていたそうです。また、2000年頃、缶詰には過度の防腐剤が添加され、栄養のない食品とのデマが広がり、消費者離れが生じたそうです。たしかに、上海市内のスーパーの売り場に並んでいる缶詰の種類は、ツナ、白桃、パイナップル、イワシオイル漬、スパムくらいしかなく、日本のようなフルーツミックスや煮物、焼き鳥は売っていません。（写真参照）こうした中、前述のSNSニュースサイトでは、「缶詰は熱殺菌と真空保存で長期保存を可能としていて、防腐剤の添加量が少なく、新鮮な状態を長く保てる



【ふじのくに通商エキスパートの王漸さん】



歴史的建築物から 寧波の今を見る ～三江口～

寧波大学外国語学院外籍教師
静岡県立大学グローバル地域センター客員講師
静岡県日中友好協議会交流推進員

横井香織



今日の寧波市は、古く唐代から「明州」と呼ばれ、東アジア海域の交流で、重要な役割を果たしてきました。「明州」の名は、明代に「海定則波寧」（海が静かであれば波は立たない）という意味の「寧波」と改められました。寧波は改革開放以後、徐々に近代化が進み、21世紀には中国を代表する港湾都市に生まれ変わりました。歴史ある寧波の建築物から、現在の寧波の姿や人々の生活を見ていくこうと思います。

寧波のシンボルといえば、まず三江口をあげることができます。三江口は唐代からの港で、甬江支流の余姚江と奉化江が合流して甬江になる地点です。日本からの遣唐使船は三江口に上陸し、その後の栄西や道元、雪舟などもここにやってきました。三江口の西側に、城壁で囲まれた寧波府城がありました。城壁の東側面と川にはさまれた江廈には、埠頭だけでなく、金融や卸売りなど商人の町があり、にぎやかな地域でした。また城内には、儒教と風水の思想にもとづいた都市が形成されました。現在も残る城隍廟や天封塔、月湖などに、伝統都市の趣を感じることができます。

現在、城壁は広い幹線道路となり、かつての城内は寧波で最も活気にあふれた繁華街になっています。中でも天一広場は、レストランやショッピング、ビジネスなどが一体となった大型商業広場です。噴水や公園が整備され、週末には野外ステージでイベントが開催される広々とした空間で、子ども連れの家族や若い人々でいつもにぎわっています。まさに寧波人の日常が感じられるスポットです。私もコロナ以前は、週に一度は天一広場に出かけて買い物をし、友人と食材豊富な寧波料理に舌鼓を打っていました。

寧波人の同僚が、三江口と聞くと、子どものころ三江口から船に乗り、奉化江沿いの鄞県の家まで帰ったことを思い出す、と話してくれました。また、天一広場が現在のように整備されたのは2000年に入ってからのことと、それまでの三江口のシンボルは第二百貨店（現在もあります）だったと、当時を懐かしんでいました。多くの人やモノが行き交ってきた三江口は、現在の寧波の発展をどう見ているのでしょうか。



【三江口（奉化江、余姚江、甬江の合流地点）】

浙江省の名酒を巡る旅 白酒



浙江のお酒といえば、紹興酒を思い浮かべますが、中国を代表する蒸留酒である白酒も、浙江省で作られています。「同山焼」、「三白酒」、「紹興槽焼白酒」、「雁蕩山酒」、「金山陵酒」などの白酒があります。白酒は、紹興酒と違い、アルコール度数が高く、からみが強いのが特徴であり、ウイスキー、ブランデーと並ぶ世界三大蒸留酒の一つであり、種類も味も豊富です。

「同山焼」

浙江省諸暨市同山鎮は、白酒の産地として知られています。浙江省の白酒生産量は年間1万トンですが、そのうち同山焼企業で、年間4千トン以上の白酒が生産されています。ここで作られる「同山焼」は、清香型白酒の一つで、地元の特産品である高脚拐糯高粱を主要な醸造原料とし、醸造水は、地元の有名な水源が使われています。芳醇・濃厚で後味が良く、現地では「江南小茅台」と呼ばれています。伝統的な固体発酵の老五甑法を採用している同山焼醸造技術は、2500年以上の歴史があり、2009年には、浙江省の無形文化遺産に登録されました。同山焼は白酒ですが、醸造されたお酒は赤く透き通っているのが特徴です。お酒が赤いのは、蒸留が終わってから高粱の葉を入れていくからです。食感は甘く、五六十度で、同山酒は「酒中君子」とも呼ばれています。



「三百酒」

嘉興市桐鄉市烏鎮にも有名な白酒があります。700年以上もの歴史がある、特産の「三百酒」は、地元でしか飲めない銘酒として知られており、民間では「杜搭酒」とも呼ばれています。烏鎮の伝統的な三百酒醸造工房「高公生糟坊」は、清同治11年(1872年)に創始され、伝統技術を採用して醸造しています。「三百」とは白米、白麺、白水を指し、一定の割合、工程を経て作られます。完成品はアルコール度数55度と高く、純粹でコクがあり、甘い香りで口当たりがよく、辛くて癖になります。



松本亀次郎の教え子

周恩来



中国人留学生の日本語教育に生涯を捧げ、日中友好に貢献した、掛川市（旧大東町）出身の教育者、松本亀次郎（1866年～1945年）がいます。松本亀次郎は、中国人留学生が増え始めた頃、1914年に「日華同人共立・東亞高等予備学校」を創立し、中国人来日留学生は5万人になり、そのうち2万人はここで学んでいます。その学生達の中には、魯迅、周恩来、郭沫若、秋瑾らがおり、新中国成立の黎明期から日中国交正常化にかけて、その時代を駆け抜けていきました。

19歳の周恩来は、官費留学生の待遇が受けられることを目指して、1917年10月に私費で日本留学し、東亞高等予備学校の本科に入学しています。周恩来はここで日本語を学びながら、大学入学試験の準備を始めました。この学校の跡地（現在：東京都千代田区立神保町愛全公園）には、「周恩来ここに学ぶ」の碑が建てられています。

周恩来が残した日記によると、松本亀次郎から個人授業も受け、自宅へ頻繁に招くほど親密な関係だったとされています。しかし、当時、日本語があまり上達せず、大学受験も不合格となり、失意のうちに1919年に帰国しています。日本での大学進学の目標は達成できませんでしたが、多感な青年期に国際政治や社会運動への理解を深めていく中で、次第に自身の政治信条を形成していきました。日本留学は人生の大きな岐路であり、日本社会に興味を持つ大変重要な時期だったといえます。

新中国設立と共に総理となった周恩来は、作家の井上靖と会った際に「日本は中国を侵略し、われわれに塗炭の苦しみを与えた。しかし、日本には松本亀次郎のような人もいた。桜のころに日本を後にしたが、その頃また日本へ行ってみたい。松本先生のお墓参りもしたい」と語ったといいます。その願いはかなわず、1976年に他界しましたが、1979年に、周恩来夫人・鄧穎超が来日し、周恩来の遺言に従って、松本亀次郎の遺族に謝意が伝えされました。



【東亞高等予備学校跡地】



【鶴峯堂】



【寄贈されたろう人形】

その後、時は流れ、2019年、天津市の周恩来鄧穎超記念館より、周恩来と松本亀次郎の「ろう人形」が掛川市に寄贈され、掛川市大東図書館に設置されました。また2021年、松本亀次郎の生家跡に、松本亀次郎記念日中友好国際交流の会により、中国からの留学生教育への多大な功績を記念する「鶴峯堂」が建立されました。松本亀次郎の功績は今も燐然と輝やいています。